

図書館だより

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

43 歳、文豪の危機を救った

遊牧の民、バシキール人の馬乳酒

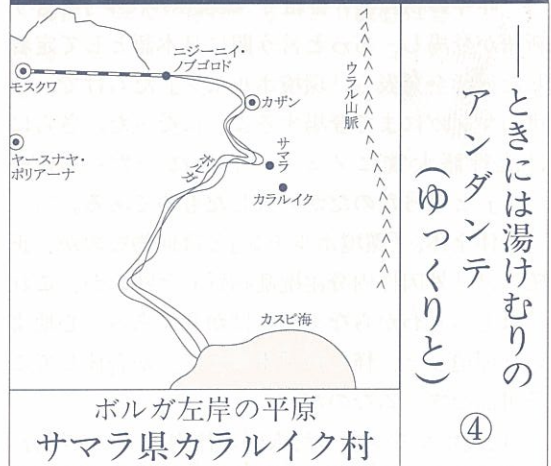
モスクワの北西に端を発し、東へ。
 カザンから直角に南下して、カスピ海へ注ぐ。
 今日も悠然と流れる、
 ロシアの母なる大河、ボルガ。
 その流れを、トルストイは幾度となく往復した。
 「馬乳酒療法」のために。

トルストイが向う先は、
 カザンの南、ボルガ左岸に広がる、
 バシキール人たちの草原だった。
 1871 年、43 歳の夏、
 トルストイはサマラ県カラルイク村に滞在した。

30 代の大半を費した『戦争と平和』、
 その疲れのためなのか？
 ホメロスを原典で読むためのギリシャ語の猛烈
 な習得のためなのか？
 そして又、ヤースナヤ・ポリアーナでの
 「教育の事業」をめぐる夫人との「不和」のため
 なのか？
 トルストイは生の減退を感じて、
 バシキール人の愛飲する「馬乳酒療法」に出か
 けたのだった。

朝から飲む「馬乳酒」はホロ酔気分させ、体
 はポカポカとして、まるで「温泉」に入っている
 ようだった。その上、「馬乳酒」には、蛋白、脂肪、

書彩生彩



ビタミンとすべての栄養素が含まれていた。
 みるみる健康を回復したトルストイは、やがて
 『アンナ・カレーニナ』の執筆に入った。

トルストイがバシキール人の草原で「馬乳酒療
 法」を行っていたまさに、1871 年。
 もう一人の天才が、エーゲ海を臨む、トルコの
 先端で古代文明の宝物を掘り当てていた。
 彼こそは、ロシア語、ギリシャ語を自在に話した
 シュリーマンその人である。49 歳だった。
 天才はまさしく、平和の中に咲く「華」ではあ
 るまいか。 (関連する読物は p. 6-7)

- p. 2. 水の話(4) (余湖典昭) ■ p. 3. 講壇余滴(3) (後藤啓一)
- p. 4-5. 気楽に読もう ■ p. 8. 北海道経済を読もう (K. K.)

水の話 (4)

環境ホルモン

余 湖 典 昭

「環境」と言う言葉は、心地よい響きを持っている。「環境」を付けただけで、言葉のイメージは断然よくなる。一方、「ホルモン」は、ちょっと怪しい響きを持っている。男性ホルモン、女性ホルモンをすぐ思い浮かべる読者の方は、かなり怪しい。私も「歴史は夜作られる」と言うが、「歴史はホルモンが作る」が正解かもしれない・・・などと、ついつい考えてしまう。今回は、視野を広げて「環境ホルモン」の話を少々。

一昨年秋、TV番組で「環境ホルモン」と言う新語が登場し、あっと言う間に日本語として定着した。学会発表も「環境ホルモン」だらけで、子供のマンガにまで登場するようになった。さらには流行語大賞にノミネートされ、「だっちゅーの！」と争ったのだから大したものである。

一体全体、「環境ホルモン」とは何物なのか。正確には「外因性内分泌攪乱物質」と呼ぶが、これではもっとわからなくなるばかりである。心地よい「環境」と、怪しい「ホルモン」が合体してこそ可能なブームなのだ。

「環境ホルモン」とは、人間の体内に入った場合、ホルモンと似た働きをする物質である。エストロゲン(女性ホルモン)と同じような働きをする「環境ホルモン」が見つかっている。極論すれば、人間がメス化し、男が少なくなることになる。マスコミを賑わしている「精子の減少」に関する論争もこの流れの中にある。また、最近の子供が「きれる」のも環境ホルモンの影響とまで言われる始末で、騒ぎはエスカレートする一方である。

一口にホルモンと言うが沢山の種類がある。おそらくこれから「環境ホルモン」はどんどん見つかるだろう。人間は本来地球上に存在しなかった「化学物質」を生産し、環境中に放出し続けており、一方で分析技術や試験法も進歩するから、「環境ホルモン」は減ることはない。「環境ホルモン大辞典」が店頭に列ぶ日もそう遠くはないはずである。

私が学生の頃、「水俣病」、「イタイイタイ病」に代表される公害問題が連日マスコミを賑わせていた。因果関係の立証に長い年月を必要とし、今だに患者の認定をめぐる議論が続いている。言うまでもないことだが、原因究明は再発を防ぐ意味はあっても、犠牲者を生き返らせることは出来ない。残念ながら、科学は原因究明に貢献したが、発生を防ぐことは出来なかった。

「環境ホルモン」の問題は、公害問題よりもはるかに複雑な問題である。現在のレベルは、「環境ホルモン型の事故発生の未確認情報が入った」程度のものである。ただしこの事故は今までと違って、加害者と被害者を区別することが難しそうである。もちろんケガの程度も原因もわからないが、ひょっとすると知らない間に既に事故が発生していた可能性もある。

人間は非常に楽観的な動物で、原因が明らかになるまでは、問題なしと思ひ込みたい性質があるようだ(そうでないと生きていけない?)。今はそれで良いとしても、将来「環境ホルモン型の事故」が、重大な事故と科学的に立証されたらどうなるのか?

酒席の怪しい話題にするだけではなく、ちょっと真面目に考えていただきたい。最終回に当たり、この質問を皆さんへの宿題としたい。

なお正解者への賞品は、????年発刊予定の「環境ホルモン大辞典」です。

これで、4回シリーズの水の話を完結します。小さい頃から、読書と作文が大嫌いな私に、こともあろうに「図書館だより」の原稿を4回も依頼するとは、編集者は重大な人選ミスを犯したものです。しかし予想以上に多くの反響を頂き、恐縮しております。読者の皆さんに御礼申し上げます。

(よご のりあき 工学部土木工学科教授)

公衆距離が密接距離に変わる時

後藤 啓 一

人間同士の距離や空間が、人間の心理にどんな影響を与えるかを研究する分野を「プロクセミクス」という。文化人類学者のエドワード・ホールによるネーミングだが、彼の代表的研究「かくれた次元」によれば、他人との距離は、大まかに分けるとつぎの四つのタイプになるという。第一は「密接距離」といって、ゼロから45センチまでの範囲、つまり、相手の表情もよくわかるし、相手の体にも触れることのできる距離である。第二は、「個体距離」と呼ばれ、45センチから1メートル70センチくらいの範囲で、いわゆる通常の会話をおこなう範囲である。第三は、「社会距離」で1メートル20センチから3メートル60センチの範囲以内でビジネス距離ともいわれる。第四は、「公衆距離」といい、3メートル60センチ以上離れている。いわば講演などの場合に当たる。もっともこれらの数字そのものは、アメリカでの話であって、お国柄や文化の差などで違ってくだらうが距離のいかんがコミュニケーションのはたらきをもつということは興味ある問題だろう。見知らぬ人が自分の傍にやってきて、ベツリとくっついて坐ったなら、「ギョッ」として立ち上がり別な所に移るに違いない。早朝や深夜のガランとした地下鉄では、お互いに見知らぬ人たちは、それぞれバラバラに、思い思いの所に坐っている。それがピッタリと寄り添って坐っているとすれば、恋人か特殊な関係の人ということであろう。われわれは通常、適当な距離をおきながら他人と相対するが、混雑したエレベーターや電車・バスでは、体で距離をおくことができないので、顔が向き合わないようになり、できるだけ体が触れ合わないようにする。電車やバスの中吊り広告というのは、そうした人たちの目のやり場として役に立っているともいわれている。ソマーという心理学者は、

個人に接近する場合に許される境界線を「パーソナル・スペース」という概念で説明している。他人が自分の自由になる境界線に入ってくると、身をひいたり、逃れたりする幅を研究した。どちらかといえば男性は前方にやや幅広いスペースをとっておこうとするらしい。すなわち、前方というのは、他人の存在をもっとも敏感に感じとる領域なのだろう。緊張を強く呼びおこすので、できるだけ多くの距離をとろうとするのかも知れない。ハイダックという心理学者によれば女性も側方からの侵入に敏感だという。これらの観察によれば、どちらの方向に、どれだけの警戒幅をもつかは、その人の社会適応のひとつの姿を反映しているのかも知れない。前方正面にバリアを築こうとする人は、社会的な競争に敏感な人なのだろうか。ところで選挙が近づくと、普段は有権者と「公衆距離」でしか接しようとしないう政治家がとたんに「密接距離」に変身しようとする。かつてナチス・ヒトラーは、暗くなり始めた夕方を演説の時間に選んだという。たしかにヒトラーと聴衆の間には「公衆距離」的なへだたりがあったから、顔もよく見えないし、話も真に迫ってこない状況であつたに違いない。しかし、ヒトラーは自分にスポットライトを当てること、この「公衆距離」を「密接距離」というきわめて見事な心理的接近を演出した。物理的な距離があつても、自分だけに話しかけているような錯覚をおこすところに熱狂的な声援をうることができるのだろう。日常生活では有権者を遠くにおいて、選挙が近づくとつれて勝手に「密接距離」をつくりだす昨今の政治家のやり方に、有権者は十分心しなければならぬ。

(ごとう けいいち 経済学部教授)

気楽に読もう！

「ポプラの秋」

湯本 香樹実著（新潮文庫）



著者の処女小説「夏の庭」は映画にもなったので見た人もいると思いますが、子供たちと老人との関わりあいがとても興味深かった事を思い出します。この作品にもまた、独特の味わいを持つおばあさんが登場します。主人公の少女は、小学校に入学した年に父親を亡くします。その事から立ち直れずにいる母親と、一緒に移り住んだアパート「ポプラ荘」の大家のおばあさんの奇妙な話からはじまる物語。18年後の秋、おばあさんのお葬式に向かう主人公の胸に、ポプラ荘の隣人たちとの生活が甦ります。父の事、母との関係、お通夜のあとで知った意外な事実……。

面白いですよ。ぜひ読んでみてください。

老人社会といわれ、世の中にお年寄りが多くなっても実際に関わりを持つ機会は少ないですよ。この本の中のおばあさんと主人公の様な交流が持てたら、子供たちの心も救われるのに……なんて思っていました。

「あんたのおとうさんは、ちゃんとあんたのことをみてるよ」「おとうさんのこと、知らないくせに」

「知らなくたって、わかるさ」「死んだことないくせに」「死んだことなくなつてね、あんたよりはちかいとこにいるもの」 ねー、読みたくなつたでしょ。（T.M.）

「パソコンに歴史あり、解説書にも歴史あり」

1998年マイクロソフトからWindows98が発売され、予想以上の売り上げを記録したことは記憶に新しいところです。

ところで、図書館に業務用のパソコンが導入されたのが1992年、その当時の最新鋭のパソコン・NECのPC-9801 FAという機種です。CPUは現在中心的なペンティアムIIの4世代程前のintel486SX/16MHz、HDは100MB、そして、OSはWindowsではなくMS-DOSでした。現在のA5サイズのモバイル・パソコンより遥かに劣る性能です。

そして今では考えられないことですが、当時はまだキーボードを叩いてコマンドを入力してコンピュータを動かしていました。それでもそれ以前に比べたら、処理速度はかなり向上していたのです。

私が大学でプログラミングの初歩を学んでいた時、学生は高価なコンピュータ本体に触ることはなく、キーボードの代わりにマークシートを鉛筆で塗りつぶし（！）教員がカードリーダーでコンピュータに読み込ませてプログラムを動かしていました。まだ、この時はパソコンに仕事をさせる為には自分でプログラムを作るのが一般的な時代だったのです。

このような時を知っている者にとって、この10年のパソコンの性能UPと操作の安易化、そして低価格化には、全く驚くばかりです。

WindowsやMac等OSがマウスを使うようになり、そのGUI化に伴い、パソコン関連の解説書も数多く出版されるようになりました。それも、

気楽に読もう！

ただコマンドの羅列と解説から、フルカラーで図版が中心の見易く理解しやすいものへと変化してきました。このことはパソコンが購入しやすい価格になり、より一般的になってきた為だと言えるでしょう。また、多種多様なアプリケーションソフトが発売されるようになり、パソコンを利用するほとんどの人にとってはそのソフトを活用することで事足りるようになったことも解説書に対する要求が高まった要因と言えるかもしれません。

その中では「エクスメディアの超図解シリーズ」、「インプレスのできるシリーズ」、「ナツメ社のステップ図解シリーズ」などは、図版や実際のディスプレイ画面を元に解説してあり、初心者でも直観的に理解できるよう構成されています。

常に新しい情報を手に入れるにはパソコン関連雑誌が必須です。数多い雑誌の中では、「ASAHI パソコン」や、「日経パソコン」の連載(特に Windows 即効テクニック等)が便利です。結構「目から鱗」の情報が載っています。

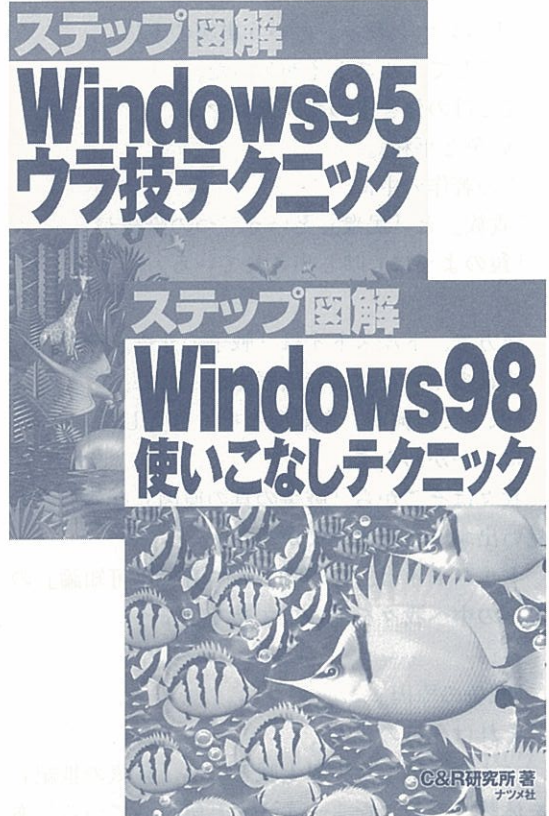
また Windows パソコンを利用しているとトラブルがつきものなのは周知の事実です。もしも重大なトラブルが起きた時はどうしたら良いのでしょうか。メーカーのサービスに電話するか、実際に機器を見てもらうかですね。それができない状況の時は、例え初心者でも、自分で対処しなければならない羽目に陥ります。そのような事はあってはならない事だと思えますが。

その時には MS-DOS の知識が必要になる場合があります。それで、今また MS-DOS 関連の本も出版されてきています。トラブルシューティングの本も多く出ています。いざという時の為に「Windows 95/98 バイブル」や、「リソースブック」等の詳しい解説書も一読しておくことをお勧めします。

最後にこれからのパソコンはどう変化していくのでしょうか。私の希望として、一家に一台へ普及する為には、トラブルを皆無にする事、そして必要な時にスイッチを ON/OFF できる事が重要だと思います。そうなると、解説書は CD-

ROM やオンラインだけで提供される事になるかもしれません。

しかし、パソコンのトラブルが皆無にならない限り、これからも印刷された解説書は必要です。パソコンが動かないと、必要な説明やヘルプが見れない事になりますからね。



◀歴史ミステリーを解くカギ▶

としての

3R's

ロスチャイルド

ロックフェラー

ルーズベルト

「ナポレオン戦争」という史実の上に、
幼くしてトルストイが失った、
父と母の像を求めた一大ロマン、
『戦争と平和』。

この著作の中に、
「貴族」と「民衆」という二つの階級が、
「鏡のように」映し出されている。

他方で、トルストイは「戦争の悲惨」を
迫真のリアリズムで活写すると共に、
「戦争とは何か」を幾度となく考究した。
にもかかわらず、

我々はそのから「戦争の真の原因」なるものを見出すことは出来なかった。

トルストイは、その時、いつも「不可知論」の繁みの中へ我々を迷いこませてしまう。

「戦争の原因」。

それは今日の我々、

つまり、第2次世界大戦という「狂気の世紀」を体験したものならうすうすと気付いている、ある存在。

巨大な金融資本の特定のグループによる「富」の独占的な追求というものに帰せられる。

トルストイが、そうだったように、同時代を生きた、

マルクスやレーニンですらも、その「存在」なるものから眼をそらし、「資本家一般」に解消してしまう。

文豪知求紀行

一続・戦争と平和の世紀みつめて

④

ロシア・トルストイ

その特定の金融グループとは、
何なのか。
それは「ロスチャイルド家」ではあるまいか。

モスクワ進攻で大敗したナポレオンは、
早くも2年後の1814年6月18日、
ワーテルローの戦いに臨んで再び敗北。
ロスチャイルド家にとってこの一戦こそ、
「巨万の富」を得る千載一遇の機会だった。

イギリス軍敗るを想定して、暴落していた株を
買い、一転「勝利」の報によって急騰した時、
売り抜けることが出来たロスチャイルド家が得た
情報は、ロイター通信の「伝書バト」であった。
彼は、そのニュースを秘密裡に受けて、市場に
先手を打った。

その彼はやがて、ロシアのバクー油田を手に入
れる。「石油を支配」するものが「すべて」を
支配する時代となった。

ロスチャイルド家と同じ現象が、アメリカの
「ロックフェラー家」についても言える。

1929年10月29日のウォール街での株暴落は、
彼がすでに「巨万の富」を手中にした「結果」に
すぎなかったのではないか。

世界恐慌はやがて「必然的」に第2次大戦へ。
その時、登場した人物こそ、

「ルーズベルト」。彼こそ、アジアの小さな島に
「原爆」を投下し、「世界分割」をリードした。

「3R's」こそ歴史ミステリーを解く鍵ではあるまいか。

白樺・白雪・白うさぎ

ヤースナヤ・ポリアーナは

あいことば
平和の愛言葉

貴族の私生児として、
莫大な財産を相続した、
『戦争と平和』の主人公、
ピエール。
彼はあたかも、
シューベルトのように、
でっぷりと太り、眼鏡をかけていた。
すでに、
古代ギリシャ風の美女、
エレンと結婚していたものの、
二人の間の不和は拡がり、
破局が訪れようとしていた。

再び元の「独身生活」に戻るべく、
ピエールはペテルブルクの上流階級から、
モスクワの社交界へと移り住んでいた。
令嬢たちは、そんな彼を

Il est charment, (イ・レ・シャルマン)
Il n'a pas de sexe. (イル・ナ・パ・ド・セクス)

「あの方すてきな方ね。
性を超越していらっしゃるわ」
と、うわさするのだった。

(北御門二郎訳『戦争と平和』
第2部第5篇第1章)

そんなピエールは、モスクワに進攻して来た
ナポレオンを暗殺しようとするが、逆に捕えら

ロシア語の「の」は語尾の母音・もしくは子音で表わされる。「の」を「生格」といい分数の分母に当る。単数の場合それはA、Bとなる。

	女性	中性	男性
「の」=	分子(主格) = -A	-O	-子音
	分母(生格) = -B	-A	-A

れて、銃殺されそうになるが、辛くも救われる。
火の海となった母なるモスクワ。
親友、アンドレイは従軍して、重傷を負う。
彼の婚約者だった、
ナターシャは邪恋に走って婚約を破棄されなが
らも懸命に看病する姿の中に「あわれ」が浮ぶ。
この「あわれ」こそ、
漱石が『草枕』の邦美さんの中に、
ゲーテが『ファウスト』の中のマルグレーテと
ヘレーナの中に見出した「あわれ」ではなかつ
たか？

アンドレイは他界し、ピエールはナターシャと
結ばれる。

そして、もう一組の結婚。
母の像、マリヤ(アンドレイの妹)と
父の像、ニコライ(ナターシャの兄)との結婚。
この二組の結婚をもって、
一大ロマン、『戦争と平和』は完結する。

1910年10月28日。

82歳のトルストイは、愛すべき、
ヤースナヤ・ポリアーナから家出する。
彼が永遠に悩んだ問題、
「女性とは何者なのか？」という問いを残して。
平和の北々西、ヤースナヤ・ポリアーナ。
そこに沸く魂の出湯こそ、我々の時を止めるア
ンダンテ。耳を澄ませば、
「白樺、白雪、白うさぎ」。平和の愛言葉が聴こ
える。(完)

「21世紀半ばのニッポン社会」を読もう

……『衝撃のシミュレーション』へのご案内

石川 英輔 『2050年は江戸時代—衝撃のシミュレーション』（講談社文庫、1998年）
『大江戸リサイクル事情』（講談社、1994年）



世紀末と大不況のまっただ中に生存し、さらに21世紀がカウントダウンに入るようになると、人類の長い歴史の中で20世紀とは何だったのか、来るべき21世紀はどのような社会になるのかの予測や論議がにわかに賑やかになるのは仕方ないことなのかもしれない。特に20世紀において産み出された多くの功罪を、反省も見直しもせず、それらを21世紀にそのまま持ち込むとすれば尚更のことであろう。

そのような中、20世紀が作り上げた「大量生産・消費・廃棄」社会が21世紀半ばにはどのようなになっているのかについて、未来物語としてSF的にまとめたのが石川英輔『2050年は江戸時代—衝撃のシミュレーション』である。石川氏は製版会社の取締役を務めながら江戸時代のリサイクル・エネルギー・テクノロジー・庶民生活事情などに詳しく、すでにそれに関連する著書が7～8冊を数えるというユニークな作家でもある。

徳川将軍家の大政奉還による「江戸時代」の終焉と明治期以降の高度な管理社会と繁栄の象徴としての「東京時代」も、20世紀末には行き詰まりを見せ、その後の革命にも似た「大刷新」期を経ての約50年後のニッポン。すでに政府組織は東京時代の百分の一に減り、東京や大阪などの大都市

は衰退し、地方分権の確立とともに社会経済・生活・文化の中心は、かつての農山漁村や地方都市に移り、日常生活の中に完全にサイクルが何の疑問もなく受け入れられている21世紀の半ば。

そのような時代での桃園（ももぞの）村。かつて東京時代には花形産業であった自動車生産に携わった長老の回顧談と大刷新社会の評価。

「東京時代の日本は、確かに世界有数の豊かな国ではあったけれど、あの頃の日本人は、生活に必要な資源の大部分を外国に頼っていました。表面的には安定しているようでも、内側はいつ崩壊しても不思議でないような状態になっていて、実にもろい社会だったことが今でははっきりわかっています。だからこそ、ちょっとつまづいただけで、次から次へと破綻が拡大して行って、ついには大刷新をせざるを得なくなったのです。その点、今の桃園村というより、今の日本は、東京時代とは比べものにならないほど貧しくなってしまったけれど、それは表面的な経済の指数だけのことで、実質は、東京時代よりはるかに健全で安定しているのではないのでしょうか。」

今日、私たちが最も重大な関心を払っているのは、景気の回復と少子化・高齢化、社会保障問題などであろう。しかし、20世紀の経済や産業構造、生活スタイルを踏襲したままでは問題解決の見通しにはなかなか難しいものがある。何となれば、来るべき21世紀では世界人口の増加、食糧不足、エネルギー資源の不足、地球環境の悪化など、持続不可能な社会の到来は待たないしなのである。

自分自身の50年後の生活を2050年の架空の農村を題材にシミュレーションしてみるのもおもしろいのでは。冬の夜長は静かで長いはずぞー……。

(K.K.)

北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.20 No.4 (通巻148号)

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目
☎(011) 841-1161 本館内線 270-275・279 工学部内線 813・814 印刷所：懶アイワード